

巻頭言 「何もしない勇気」

教育研究所連絡協議会 委員長 伊東 宏幸

昭和50年代後半から平成の後半にかけて学校で荒れる子どもが多かった。新しい時代を迎え、子どもたちは落ち着いて生活をしている。しかし、学校に来ることができない子どもや人との関わりを苦手とする子どもは多く、学校では、様々な立場の方々とチームを組み、一人一人に応じた教育を考えながら支援をしている。

アインシュタイン博士は『人生とは自転車のようなものだ、倒れないようにするには走らなければならない』との言葉を残している。

この言葉は素晴らしいと思うが、教育においては必ずしも当てはまるとは言えない。

恥ずかしい話であるが、私自身が若い頃この様な教育をしていたような気がする。そのために当時の生徒の心に傷をつけていたのではないかと思う。この歳になると反省だらけである。

武者小路実篤先生は『さあ、俺も立ち上がるかな。まあ、もう少し座っていよう』との言葉を残している。

この言葉はとても深いと思う。みんなと同じように進まなくてもいい。自分のペースで進んでいけばいい。疲れているときに走らなくていい。走れる力がでてきたら、また走り始めればいい。いや、歩いてもいい。そんな意味が込められていると思う。正に今、教育に必要な言葉ではないかと思う。

子どもたちには、正しく自分を理解し、自分のペースで、そして、人と競争するのではなく、協働して、穏やかな、温かい社会をつくって欲しいと願っている。

研究所便り① 自然観察会

理科副読本「小田原の自然」



活用講座として行っている「自然観察会」は、年8回、小田原の各地域を巡って、植物・昆虫・磯の生物・地形・地質・野鳥などを観察しています。5～6月頃に市役所周辺で実施する「ツバメの調査」では、毎年同一地点を観察する「ラインセンサス」という方法でツバメを観察していて、近年ツバメの巣がかなり減少してきている様子がわかります。毎年同じ内容で行う講座がある一方、変化を持たせている講座もあります。秋に実施している「植物観察」です。小田原は自然林が市街地に残されている県内でも珍しい街です。さらに、ちょっと足を延ばせば、山地の自然を観察することもできます。その特色を知ってもらうために城址公園周辺と長興山を交互に訪ねています。他にも小田原の自然を再発見できる興味深い講座が揃っています。児童(小4以上)・生徒の皆さんだけでなく、教職員の皆さんの参加もお待ちしています。

研究所便り② パワーアップ研修

今年度は、小学校12名、中学校5名、計17名の受講者(対象は経験年数4年から10年がめやす)が、自らのテーマとその実現のための手立てをもって、授業の改善・向上を目指しました。研修相談員が受講者の学校へ出向いて研修(年間6回)をするスタイルで、受講者の負担軽減をし、ゆとりある中で授業研究をしています。授業1時間とその後1時間程度の話し合いがセットです。研究所では、「子ども一人ひとりが主体であること、その主体者である子どもが学習に意欲的に向かうことが大切であること。それには、教材と授業者の豊かな対話があること、子どもたちが自分の考えと友達の考えと比べながら高め合えること。そこには、授業者自身の生き方があることが重要であること。」を話します。中でも、この授業が子どもの一生にどのような意味があるのか考えて授業づくりする重要性を力説します。受講終了後は、自らの力でよりパワーアップができることを期待します。

研究所便り③ 尊徳学習展示

「小田原市内の子供たちが、二宮尊徳翁の事績等を学習することにより、郷土の先人を愛する心を育てるとともに、自己の生き方の一助とする」ことを目的として「二宮尊徳学習」が行われています。今年も市内小学校全25校がそれぞれ取組を行いました。児童が講師の話の聞いたり、尊徳記念館を見学したりして学んだことを、学習の成果物として表現しました。その作品は前半・後半に分かれて市役所の市民ロビーに展示され、たくさんの人たちに見てもらいました。どの作品もとても力が入っていて、見ていると一生懸命取り組んだ様子が伝わってきました。



小さなころも 共同研究のまとめ

昨年度・今年度の2年間、2つの研究を行ってきました。12月に開催した公開研究会にはそれぞれたくさんの先生方に参加していただき、授業の参観と協議に熱心に取り組んでいただきました。公開研究会の様子をお伝えします。今後、「共同研究集録」を作成し、各校に送付する予定です。

<小学校外国語の授業と評価に関する研究>

12月9日(月)に富士見小学校にて公開研究会を行いました。

板垣教諭による6年生の外国語活動の授業では、「自分の紹介したい町を紹介する」という、児童が楽しく活動できる単元計画を立て、来年度からの外国語の指導内容である「書くこと」にも取り組みました。児童が自分の考えた文を進んで発表する様子が見られました。

協議はグループ形式で行い、外国語科についての理解を深めました。また、中学校の先生方にも多数参加していただき、指導の在り方について小中での交流をすることができました。



<ICTを活用した授業づくりに関する研究>

12月13日(金)に富水小学校にて公開研究会を行いました。

笹森総括教諭による算数の6年生「場合の数」の授業では、「2人に1台のタブレット」という環境で、それぞれの児童の考えた方法を交流する場面を公開しました。様々なアイデアを、児童の手元のタブレットやテレビに表示しながら、視覚的に理解することができ、理解が深まっている様子が見られました。

協議の中では、参加した先生方に実際にタブレットを操作する体験をしていただきました。アンケートには、今後、ICTの活用をしていくことが楽しみだという声が多くありました。



ある教室から

温かい居場所がある幸せ

教育指導課 指導主事 片渕 徳子

春、ある園を訪問すると、園児達は自分の席に座り、先生の話を生懸命聞いていました。話が終わると、皆は待ちに待ったという様子で製作活動を始めます。ふと部屋の後方を見ると、集団に入らず、先生に抱っこされている子がいます。「皆と一緒に作ってみる？」と先生が誘っても、首を横に振り、参加する様子はありません。自由遊びの時間も、皆はブロックやお絵かきをして友達と楽しそうに話しながら遊んでいます。しかし、抱っこされていた子は、一人でブロック遊びをし、友達と関わることはありません。近くの子も、なんと声をかけてよいのかわからない様子。この子の居場所は部屋の一部、関わる人もクラスの一部のままなのかなと心配になってしまいました。

秋になって再び園を訪問しました。すると、様子が大きく変わっていました。抱っこされていた子がどのように過ごしているのか気になって探すと、なんと、数人の友達と一緒に遊んでいるではありませんか。紙コップを高く積み上げるゲームをして楽しそうです。紙コップが足らなくなると、「紙コップ、ちょうだい。」と友達に話しかけています。春に訪問した時は、困った時に頼る相手は先生でした。でも、今は友達を頼りにしているようです。

その後、お遊戯会のリハーサルが舞台上が始まり、先生が「始まるよ。」と皆に一言声をかけると、子ども達は自然と観客席に自分の椅子を並べ、鑑賞し始めます。年長児は、笑顔で年少児の発表を見ています。発表が始まると、子ども達は拍手をして盛り上げます。発表する子ども達も、皆の声援に応えようと一生懸命です。コップで遊んでいた子も、楽しそうな雰囲気誘われ、椅子を持って観客席に近づきましたが、座る場所が見つかりません。すると、困っている様子に気付いた友達が「隣においで。」と声をかけました。その子は嬉しそうに椅子を置いて座り、楽しそうに鑑賞し始めました。先生は、遠くで子ども達の様子を温かく見守っています。先生の顔は笑顔、子ども達の顔も笑顔。抱っこされていた子は、クラスに温かい居場所を見つけたのだなと嬉しく思えた1日でした。

